



「愛はブルースのように」
(補)

第5話「鳥」

内嶋 善之助

1. [本文](#)

第五話 「 鳥 」

音符一つ改竄（かいざん）されるだけでも、自分の命にかかわることです。そういった作曲家がいた。

その朝、夜中までやった仕事の片付けのためにヒップへ行くと、一人の男が入口の間口の広い階段に倒れていた。男は泥酔しているか、気絶しているふうに見えた。肩をたたいて声をかけてみると、男はすっと起き上がり「昨日の音響さんですか？」と訊いた。「ええ」「あなたを待ってました」と強引に握手してくる。「これから、ちょっと来てくれませんか？」「でも、僕はこれから片付けがあるんですが...」そういうと彼は笑って答えた。「大丈夫です。ヒップのマスターには断っておきましたから」理由がわからないまま、僕はその男に腕をつかまれ、通りにいたタクシーへ押し込まれた。走りだすと「朝ご飯、まだでしょう」とマクドナルドのカー・スルーに立ち寄り、無理矢理ハンバーガーとコーヒーを押しつけられた。確かに起きてから何も食べてなかったから、コーヒーの香りは鼻孔から脳を直撃し、コーヒーは美味しかった。こんな便利な施設が街にあったことを思い出した。しかし、この男はまだ用件も自分の名前も口にしていない。視線を車の天井へ向け、昨夜のことを思い出してみた。

昨夜、ヒップでやった仕事は、変哲のない若者達のレコーディングだった。バンドをやってる五人の若者がこの町から東京へ出る決意をし、CDを一枚作って東京へ乗り出そう、という話がヒップで持ち上がった。それでレコーディング技術者に、ときどきヒップへ遊びに来ている僕が紹介された。ギャラは彼らの言い値で三万円。録音したその日のうちに整音編集してCD原盤のファイル作成までを、たった六時間でやるという内容だった。アマチュアのマキシ・シングル四曲だから、何とかできたものの、プロのミュージシャンなら一曲もできない相談だ。ヒップの営業時間中に彼らは一時間半ほど演奏した。それを録音したものを、閉店後四時間かけて編集を始め、終わったのが朝が白む午前五時だった。一度帰宅して一眠りしてから片付けに戻るつもりで午前十時にヒップに戻ってきたのだった。たしか、そのとき僕の仕事を注意深く見ている客が一人いた。ミキシングやトラック・ダウンまで付き合っていた男……。たぶん彼だったのだろう。

ハンバーガーをタクシーの中でパクつきながら男は「道長雄三（みちなが・ゆうぞう）です」と名乗った。道長という珍しい名字には聞き覚えがあった。「もしかすると、作曲家の道長さん？」と訊くとうなずいた。「なんの用事ですか」「仕事をお願いします」「何の仕事ですか？」「くれば、わかります。あなたにしかできない」道長は、東京芸術大学を卒業したが、多くの卒業生と同じように専攻したその道で生活できない芸術家の一人だった。たまたま、この町出身の作曲家として正月の新聞で紹介された記事を、僕は読んでいた。「やっぱり、あなたしかいない」「録音ですか？」「いや、違う」「じゃどんな仕事なんですか？」「それが...とても説明

しにくいことなんだ」道長は、本当にどう説明してよいのかわからないといった風だった。それでもずっと親しげな笑顔だったから、怪訝とも強要とも感じなかった。道長は、およそ鋭い感覚を持っているとは感じさせなかった。普段は、まったく別の仕事をしていて、家業の家族従業員をやっていると語った。しかし「音楽を書くことがやめられないんです」といった。

「どんな音楽を作曲しているんですか？」と、興味を覚えて訊いた。「演奏してもらえるものなら、なんでも作るんだけど、なかなか依頼はこないね」「今日の僕の仕事というのは、あなたの作品に関係した仕事ですか」「うーん……なんといつてよいか。とにかく、聴いてほしいのです。僕の曲を演奏してもらった録音を」「はい」「それで、もしも編集で修正できるなら修正してほしい」「はい」「でも、無理なら無理でダメだといつてほしい」「え？」「とにかく聴いてください」「はあ……」

昨夜は大変な編集作業だったことを思い出した。作品のよしあしはともかく、難しい一曲について三回も録音をとった。ベースが間違ったり、ギターソロが外したり、ボーカルが入り方を間違えたり、まともなテイクは一つもなかった。何度やってもその曲だけはうまくいきそうもなかった。このままでは夜が明けるから、つないで編集しようかと提案した。昔、オープン・テープで録音していたころは、ハサミとスプライシング（粘着）テープで文字通りつないだり切ったりしたものだが、最近のデジタル録音は、録ったソースをパソコンの中で編集してしまう。切り間違っても簡単に取り消しができし、タイミングの取り方もとても簡単になった。だから、ベストな部分だけを切り取り一曲につないでその場で聴かせたら、彼らは大喜びだった。幸い楽器のチューニングやテンポがずれていなかった。全体をエコー処理すると、つなぎ目はまったく目立たなかった。

その曲の編集が終わったとき、背後で「それは、どうやったのですか？」と質問した男がいた。思い返せば、それが道長雄三だったような気がする。そう回想しつつ、僕は道長がしきりに空を仰いでいるのが不思議に思えた。「どうかしたんですか？」「あ、いえ。何でもありません」人は、何でもありません、というとき何かあるものだ。僕みたいな四十五歳にもなった中年はごまかされない。それも、いま遭遇している重大な問題について、何か気になることに違いないと感じた。演奏者の表情に音響の技術者は、聴き手以上に神経質になるものだ。すくなくとも僕はそうだ。道長は演奏者ではないにしても、作曲家という間接的な演奏者には違いない。その顔には演奏に対する不安があらわれていた。

「ここが仕事場です」といって到着した場所は、山手の別荘が散見される地区だった。タクシーは、高い木立に囲まれた敷地のモダンなコンクリートの建物の前に止まった。そこは大きな教会のようだった。タクシーを降りると同時に玄関から年齢三十くらいの、地味な普段着を着た女性が出てきた。タクシーが戻ってゆくと「お疲れになったでしょう」と僕に声をかけ、深々と頭を下げた。僕はびっくりした。こんな歓待をうけたことは、これまで一度もなかった。いや、妻の実家に結婚の許しを乞うためにいったとき、妻のお母さんが深々と頭を下げたときくらいだ。道長は、妻ですと紹介した。道長自身は、年齢不詳だ。ヒップの前で僕を見たとき五十歳くらい

に思えたが、空を見ていたときは二十歳代の面影だった。パフォーマーや芸術家にはよくある印象だ。

生活感のない建物だと思いながら玄関を入り、驚いた。そこは録音スタジオと演奏会場を兼ねた音楽専用空間のエントランスになっていた。ミキサー室のドアが開いていて、中へ案内されると、そこに顔見知りの音響技術者がいた。僕は「やあ、本田くん」と挨拶した。本田は困りきった顔で、「あ、真藤さん。本当に連れて来ちゃったんだ...」と、何かをあきらめたような表情をつくった。道長は「来てもらったのは、これから再生する録音内容を、真藤さんに評価してもらいたいからです」「評価...?」「はい」「いったい、どういうことです」道長は、大きなため息をついて、話し始めた。

道長が二年前から作曲に取り組んでいた三楽章からなる弦楽協奏曲が二月前に完成し、その初演を前にサンプルCDを制作してくれ、と契約している音楽事務所から依頼があった。そこで、音楽事務所は演奏を国内では中堅のオーケストラから十七名のメンバーを選んで一週間雇い、このスタジオへ派遣してきた。道長の楽譜は相当な集中を必要とする作品らしく、五日間の練習でも演奏がうまく合わなかった。楽譜が難しすぎるのではないかと楽団員達はいったが、コンサートマスターはその弱音に同調しなかった。「それは、君達の技術がこういったものを前提にしていけないからだ。」と苦い顔でいい、拙いとはいわなかった。それでもどうやらミスなしで演奏ができるようになったが、すでに契約期間の最終日の午後になっていて、帰りの飛行機の時刻まで四時間だった。録音のための演奏は二回行われ、最初の演奏は勢いがあって新鮮な響きであった。ところが、それはスタジオの換気口から鳥の鳴き声が最初から聞こえていて、どうせ正式なテイクにはならないだろうと気負がなくなった思い切った演奏だったという。次いで二回目のテイクでは、続いていた緊張の疲労が見え隠れし、簡単な演奏箇所でも三カ所のミストーンが出てしまった。ミスの出た第三楽章を取り直したが、平凡な安全な演奏になってしまったという。それで契約の時間が終了し、演奏者は帰ってしまった後、編集で何とかならないかというのが道長の苦肉の策だったという。

モニター室でデジタル録音機に録音された最初のテイクから第一楽章から第三楽章までを、僕は二回聴いてみた。一回あたり約二十八分間。そして問題の第三楽章の演奏も録音も確かによかったが、弦が細く高く歌う部分で、鳥の鳴く部分が六秒間ほどあった。そのことを除けば特に問題はなかった。現代音楽がどういう音楽か、僕には説明しようがないけれど、道長の作曲した音楽は美しい旋律が弦楽器で変奏されながら展開してゆく。それは、ときには雷鳴のように、ときにはそよ風のように感じられた。そして鳥の鳴き声を模した第三楽章の冒頭の変奏された主題の終わりあたりに、二羽のスズメの鳴き声が録音されていた。それは、こまかな風の表情をにおわせる変奏の始めの部分で、何らかの処理でとりのぞくことは不可能だった。二回目のテイクの第三楽章を聴いてみたが、演奏自体も焦っていたのかまったく駄目だったし、鳥が鳴いていたまさにその部分が、サクスのミストーンで冗談のように笑ってしまったからだ。だから差し替えて編集することはできなかった。

僕はスタジオに入り、天井を見上げた。そこには換気口があって、スタジオ内の空気を下から上へ流通させ、こもった熱気を屋外へ放出する構造になっているらしかった。それを黙った見たま、僕は鳥の声を聴こうとした。僕は、モニター室の防音になったガラス窓から見えるように、本田を手招きした。そしてやってきた彼に、「ここでさっきのうまきった演奏を、できるだけ大音量で聴かせてくれないか。特に鳥の鳴く愛三楽章を極端に大きくして。それにモニター室も同じように大きく」と頼んだ。本田は「はい」と苦い顔でうなずくと、ミキサールームへ戻った。

音楽が鳴り始めると、道長は、二台のモニタースピーカーを見すえた壁の真ん中に、大きな柔らかい背もたれのあるソファに座っていた。両手の指先どうしを合わせて鼻先に三角形の空間をつくり、目を閉じているのがガラス越しに見えた。その表情は第三楽章が近づくと険しい表情になるのがわかった。ところが、今回はそのかぼそい部分を大音量でならしはじめた。第三楽章がとても大きな音でなり始めると、道長は目を開いた。そして、すこし驚いた表情で口元を横にひろげすこし笑った。そのとき道長の胸部から頭部にかけて深い海の青にも似た光が立ち上がるのが見えた。いや、それは、宇宙から見た地球の表面を覆う青い大気のような輝きだった。録音された演奏を道長がどう感じているのか、僕はわかった。

僕には最初から二つの回答のどちらかを選択するしかないと思った。一つは、今回の録音はすべて失敗と認め次の機会を待つべきだ、という回答。もう一つは、鳥の鳴く声が録音されたまま発表すべきだという回答だった。鳥は、まちがいなく道長が書いた曲に反応して鳴いていた。もっと正確にいうなら、鳥は、道長の問いかけに対して、返事をしていたのだ。気が付くとスタジオの空間中に、青い光のかたまりが飛びかうのが見えた。それはよく見ると鳥のつばさのようだった。演奏が終わったとたん、いっせいに鳥達が鳴いているのが換気口からきこえてきた。僕は、モニター室へ入るなりこういった。

「このまま、道長さんの聴かせたい人へ聴かせてもいいんじゃないですかね」

道長は、うん、と声を出す代わりにまぶたを閉じて小さく何度かうなずいた。

(了)